

〈新刊紹介〉

馬瀬良雄教授著

『言語地理学研究』

柏本雄幸

方言学の泰斗でいらつしやる馬瀬先生の御研究のうち、方言の地理学的研究に関する御論文の十九篇が、信州大学御退官の記念として一書にまとめられたものである。

本書の紹介文を書くにあたって、私は、長野県地図と首つ引きであった。お陰で長野県の地理に明るくなり、鉄道地図なしに一人旅が出来そうである。皆さんも是非傍に長野県地図を置き、読んでほしい。理解も進むし、楽しさも増すであろう。そして、本書の随所に見られる表現、つまり、「標準語アマダレを援軍として迎え……上伊那地方全域を制圧し、諏訪地方の「つらら」のアマダレ類と対峙する」(五六頁)、「旧柵村へ銚先を向けるが……の邀撃を受けて屈服した」(一九四頁)、「退去につぐ退去を余儀なくされ……遂に完全に殲滅される」(二八五頁・傍点は

筆者)などの用語使用の背景には、言語攻防の歴史が走馬灯のように浮かんでいるのだと、味わつてはいかがだろう。本書の構成は次の通りになっている。

序章 言語地理学——歴史・学説・調査法——

第一章 方言の分布と改新 1. 同音衝突——相補分布との関連で—— 2. 方言分布からみた「混淆」 3. 神主の方言をめぐる虫たち 4. 「父」と「母」の呼び方 5. 「かんぞう(萱草)」と「たんぼぼ(蒲公英)」 6. 信飛国境地帯でのカタツムリとナメクジの方言分布とその解釈

第二章 民俗言語地理学へ向けて 1. 言語・民俗地理学の提唱 2. ある山村地帯での「もんべ」の方言分布とその解釈 3. もんべの方言 4. きたない話で恐縮ですが…… 5. 「てんとうむしだまし(偽天道虫)」と「てんとうむし(天道虫)」

第三章 方言の社会的変動 1. 川中島平及びその周辺地方のアクセント分布とその推移——二モーラ名詞を中心に—— 2. 川中島平及びその周辺地方のアクセント分布とその推移——三モーラ名詞を中心に—— 3. 「とうもろこし」と「めんこ」 4. 学区と方言

第四章 方言区画論と方言圏論 1. 東西両方言の対立

2. 方言意識と方言区画——信飛国境地帯を例に——
3. 方言周圍論再考（筆者注・「まえがき」「あとがき」の類は割愛した）

序章は、本書の序説をなすと共に言語地理学へのすぐれた入門書となつてゐる。調査法の解説などは、研究への思いを掻き立ててくれる。第一章では、まさに方言地理学の醍醐味を味わうことが出来るよう。第一節の「同音衝突」は長野県の方言を使って、様々な同音衝突の事象が示されており、興味をそそられる。第六節のカタツムリとナメクジの分布解釈には、柳田国男氏の、「蝸牛考」での解釈を訂正するお考えが示され、学界で注目されている。

第二章は、「向けて」とか「提唱」とあるように言語地理学への新しい視点を示されたもので、多くの示唆を含んでいる。今は見ることも無くなったが、「もんぺ」という機能性に富んだニューモードが村の生活に入つて来ると、古い方言と衝突しながら新しい方言を創造していく、言葉と生活の生きざまに目を見張る思いがした。中世の日葡辞書に「泥にfungomu (フンゴム)」の言い方が出て来るが、雪を踏んで進む「もんぺ」の方言にフンゴミがあることを知り、愛着を覚えた。第四節の「きたない話」も読んでほしい。シヨックだったが、人々の生活の智恵として、愛情

を持つてこの方言に接していただけるように私には思えた。

第三章は、割愛させていただく。第四章の「東西両方言の対立」は、東西両方言に分ける従来の言語指標に対して反省が述べられ、新しい言語指標がしめされている。第三節はご承知とは思いますが、柳田国男氏が全国からカタツムリの方言を集め、その分布が波紋のように中から外へと輪を描きながら広がっている事を示された、その「蝸牛考」での方言周圍論の再評価を示されたものである。第四章が本書の最後にあるのを見る時、先生の「言語地理学」が、日本の言語地理学にあるのだと強く感じた。

最後に、私が、本書の紹介文を書くような分でないことは、十分に承知しているが、学生たちが本書を手にする時の一助にもなればと思ひ、筆を執つた。誤解や理解不足の点は、御寛容を願うものである。

（平成四年十一月三十日、桜楓社刊、四六二頁）